

修士論文要旨
2010年1月

青年期における摂食障害予備群の行動パターンについて

指導 鈴木 平 准教授

国際学研究科
人間科学専攻 健康心理学専修
208J5008
鹿島 佳織

目 次

1. 研究の背景
2. 研究
 - (1) 目的
 - (2) 方法
3. 結果と考察

1. 研究の背景

摂食障害は極端な痩せをきたす Anorexia Nervosa と、発作的で抑制できない過食を特徴とする Bulimia Nervosa に分けられ、両者の診断基準を完全に満たさない場合、Eating Disorders Not Otherwise Specified と診断される(切池,2000 ; 鈴木(堀田),2008)。一般に思春期青年期の女性に多いといわれているが(向井,1998,中井,2000)、近年では性別や年齢を超えて広がっている(切池,2000, 鈴木(堀田),2008)。また、一般の学生の間においても「痩せ過ぎ」や「食べ吐き」といった摂食障害と思われる事例が増加している(中井他 2003 ; 小牧・可知,2005)。発病の要因について、中井(1999)は、「文化・社会的背景、環境的要因、個人要素といった準備因子に、ダイエット、ストレス、思春期の心理的・生物学的背景といった誘発因子が加わることによって成立する」と報告している。切池(2000)は、摂食障害患者について、「“良い子”で育ち、八方美人的に振るまい、何の問題も有していないように見えるが、内面的には葛藤に満ちており、それを言語化できない、感情の気付きと表現が抑制されている」と指摘している。宗像(1993,1996)は、自分の本音を抑えて他者の期待に応えようとする行動特性を、「自己抑制型行動特性」(通称「イイコ行動特性」)と名付けている。このイイコ行動特性と摂食障害傾向との間には、有意な関連性がみられている(吾妻他,2002 ; 石田他,2001)。こうした摂食障害傾向の者と関連性がみられるイイコ行動特性は、社会的同情性と感情抑圧を特徴とする TypeC 行動パターン(Temoshok & Dreher,1992)と類似している。

2. 研究

(1) 目的 これまでの研究では、TypeC 行動パターンと癌患者については多く行なわれているが、心身症領域をはじめとするその他の疾患との関連性についての研究は乏しい。そこで、質問紙調査により摂食障害予備群にみられるイイコ行動特性と関連性があると思われる、TypeC 行動パターンのストレス対処方略と自尊感情、および社会的要因が摂食障害傾向にどのように関連しているかを統計学的に明らかにする。

(2) 方法 2009年7月、18歳から20歳代前半の大学生男女を対象に、自己抑制型行動特性尺度(宗像,1993)、Short Interpersonal Reactions Inventory 日本語短縮版の Type1、Type2、Type5 の3下位尺度(熊野他,2000)、Tri-Axial Coping Scale(神村他,1995)、自尊感情尺度邦訳版(遠藤他,1974)、社会的要因尺度(前川,2005)、日本語版 Eating Disorder Inventory の「痩せ願望」、「過食」、「体型への不満」の3下位尺度(志村他,1994)について回答を求めた。さらに、年齢、性別、身長、体重、理想体重とダイエット経験の有無について記入を求めた。

3. 結果と考察

本研究で対象とした女子学生の多くが、単相関で TypeC 行動パターンと関連性がみられたイイコ行動をとっており、EDI-91 得点も高い傾向であった。また、単相関および重回帰分析によって、摂食障害傾向には、文化・社会的要因が大きく関連していることが示唆された。判別分析の結果から、TypeC 行動パターンをとる傾向の者ほど、これまでにダイエット経験があり、痩せ願望が高いことが示唆された。また、極端に痩せた体型を望んでいる者や摂食障害傾向が高い者は、「情報収集」、「計画立案」、「放棄・諦め」といった「問題焦点型」のストレス対処方略をとる傾向であることが示唆された。さらに、重回帰分析により、単相関ではみられなかった TypeC 行動パターンと摂食障害傾向の潜在的な関連性を見出し、共分散構造分析によって両者の因果関係のモデルを検証することができた。

自分の気持ちや考えに不正直に、常に他者を優先することをノンアサーティブという(平木,1993)。これは、イイコ行動特性や TypeC 行動パターン類似していると考えられるだろう。

ノンアサーティブの者ほど、摂食障害傾向が高まると報告があり(神田・古口,2002)、本研究の結果を支持するものと考えられるだろう。しかし、ある行動パターンが、心的・身体的疾患に顕著にみられるという証拠を示すための統計学的な関連性は、因果関係を示唆することはあっても、それを証明するものではない。今後の摂食障害傾向の研究において、TypeC行動パターンを考慮しつつ、更なる研究の進展が望まれる。

引用文献

- 吾妻ゆみ・大野弘之・稲富宏之・田中悟郎・太田保之 (2002) 女子大学生における食行動の実態とその社会・心理的要因について 精神医学, 44(5), 521-527.
- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 (1974). Self-Esteem の研究 九州大学教育学部部門紀要, 18, 53-65.
- 平木典子 (1993). アサーショントレーニング「さわやかに自己表現」のためにー 日本・精神技術研究所
- 石田彩子・伊達真理子・渡邊陽子・吾妻ゆみ・稲富宏之・田中悟郎・太田保之 (2001). 女子短大生の食行動と社会・心理的要因 長崎大学医学部保健学科紀要, 14(2), 35-41.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1995). 対処法略の3次元モデルの検討と新しい尺度(TAC-24)の作成 教育相談研究, 33, 41-47.
- 神田淳子・古口高志 (2002). 摂食障害傾向の認知行動的特徴への対人関係ストレスと自己主張行動の影響 日本医事新報, 4080, 21-25.
- 切池信夫 (2000). 摂食障害 食べない、食べられない、食べたなら止まらない 医学書院
- 小牧元・可知悠子 (2005). 全国8府県における養護教諭意識アンケート調査ー10代の若者における摂食障害発症の危険性, その早期発見と対策のためのー 心身医学, 45(9), 707-718.
- 熊野宏昭・織井優貴子・山内祐一・瀬戸正弘・上里一郎・坂野雄二・宗像正徳・吉永馨・佐々木直・久保木富房 (2000). Short Interpersonal Reactions Inventory 日本語短縮版作成の試み(第2報)ー33項目版への改訂ー 心身医学, 40(6), 447-454.
- 前川浩子 (2005). 青年期女子の体重・体型へのこだわりに影響を及ぼす要因ー親の養育行動と社会的要因からの検討 パーソナリティ研究, 13(2), 129-142.
- 向井隆代 (1998). 摂食障害 日本児童研究所(編) 児童心理学の進歩ー1998年版ー 金子書房 pp.225-246.
- 宗像恒次 (1993). 燃えつきおよびその関連尺度 桃生寛和・早野順一郎・保坂隆・木村一博(編) タイプA行動パターン 星和書店 pp.218-235.
- 宗像恒次 (1996). 最新 行動科学から見た健康と病気 メヂカルフレンド社
- 中井義勝 (2000). 摂食障害の疫学 心療内科, 4, 1-9.
- 中井義勝・佐藤益子・田村和子・杉浦まり子・林純子 (2003). 大学と短大の女子学生を対象とした過去20年間における摂食障害の実態と推移 精神医学, 45(12), 1319-1322.
- 志村翠・堀江はるみ・熊野宏昭・久保木富房・末松弘行・坂野雄二 (1994). 日本語版 Eating Disorder Inventory-91 の因子構造について 行動療法研究, 20(2), 8-15.
- 鈴木(堀田)眞理 (2008). Primary care note 摂食障害 日本医事新報社
- Temoshok, L., & Dreher, H. (1992). *THE TYPE C CONNECTION: The Behavioral Links to Cancer and Your Health*. New York: Random House.(L・テモシヨック・H・ドレイア 大野裕(監) 岩坂彰・本郷豊子(訳) (1997). がん性格ータイプC症候群 創元社)